

〈研究目標〉

幼児の絵を単に知的要素のみでなく、性格・環境をあらわすという立場から、自画像のもつ意味を重視して、幼児の自己のとらえかた、外界への適応過程を発達的にとらえようと思った。

〈研究対象〉

東京渋谷のさくら幼稚園児のもの三千五百枚を対象とした。

〈研究方法〉

分析基準をマッコーパー・レヴィーの研究、大伴・扇田氏の研究のものを参考にして一四三項目のものを作成し使用した。整理の仕方としては、個人を単位として、二年保育児一人約百枚、一年保育児一人約五十枚をまとめて、それぞれ年令別、月別、男女別に集計した。統計的処理としてはノンパラメトリック法のランの傾向分析、ムワ・ワリスの検定、Tテストを用いた。

〈結果のまとめ〉

分析基準の検討については、比較的問題のあるものを項目に選んだが、すべて一杯でなく、四つの型があり、男女によっても異っていた。しかし、項目の数だけで比較すると、一四三項目中一〇七項目が、全体の子どもの二十％以下しか描かなかったというから、分析基準の予測性が比較的高かったように思われた。

次に、年令的発達過程、幼稚園生活への適応過程、保育のもつ意味、色彩についてまとめたのべると、二年保育に関しては、二年間の幼稚園生活が、男子では良い面の積極的増進を、女子では男子と同じような型のもと、女性らしさを増進させるものというように、保育の効果が異っているように思われた。色彩に関しては、男子は五才末まで、女子は四才で発達はとまり、女子に色の数は多く

みられた。一年保育児に関しては、男女共に均斉化には著しい進歩がみられ、二年保育との差は色彩においてもみられなかったが、共同生活でもたらされる人間関係への積極的関心などが、一年保育児では劣っているのがみられた。

幼児の観察教育について

(第一報)

幼児と保育者の描いた

汽車の絵の比較研究

広島女子短期大学

山 中 和 子

山 内 美 子

〈研究目的〉

科学教育の重要性が叫ばれている今日、幼児が興味を持っている乗物を取り上げて、幼児と保育者に汽車の絵を描かせ、いかにすれば幼児の観察教育を合理的におこなうことが出来るかを考究しようとした。

〈研究方法〉

保育所、幼稚園の幼児二〇八名と保育者二九三名に汽車の絵を描かせ、これを集計するに当り次の如き枠を設けた。蒸気機関車が客車または貨車を連結しているものでしかりこれを機械的に描いてあ

るもの。すなわち、機関車、炭水車、車輪、線路を描いていること、線路と車輪、車輪と車体が付いていて、連結があること。車輪は機関車が 4〜7 個。炭水車が 2〜4 個。客車は 4 個と 6 個であるのが正しい」とした。

△調査成績

幼児と保育者の類似点 機関車、車輪を描いたもの、車輪と車体が付いているもの、炭水車を描かないものが略々同じ位である。描き方はフロンタリテイの法則にのっとっているものが多い。幼児と保育者の相異点 線路を描いたもの：幼児 保育者。連結があるもの、線路と車輪がついているもの：幼児 保育者、保育者にはないが幼児の絵の中で透視的な絵や客車に煙突を付けたものがある。

△考 察

小物体を全体的、直観的に掴むのは幼児の観察の特徴であるが全体と部分との関係を有機的、総合的に考える能力に欠けているようである。この際、興味を持続させつつ事物を細かく観察させると既得観念を徐々に修正し事物を正しく把握する態度、合理的に判断する態度が養成されるのではないだろうか。ベルグソンが直観教育の重要性を述べているように事物の大小にかかわらず直観的に正しく把握するように観察教育を施したいと思う。本調査の結果、現在の母姉は過去において、事物を直観的に正しく把握する教育がなされなかったのではないかと思う。この弊を次代を背負って立つ幼少年には残したくないと思う。

* * *

幼児の遊具に関する一考察

―遊具の色彩について―

愛育研究所

竹田 俊雄

一、研究の目的

幼児の遊具に施されている色彩は幼児の色彩好悪に應じるものであるか。幼児はどのような色彩の遊具を好むかを条件的に明らかにしようとする。

二、研究の方法

実験材料として、金属玩具の自動車と金属製円板各十五個を標準色 (Orward 色相一、三、五、七、九、一一、一三、一五、一七、一九、二一、二三、白、灰、黒) で塗装し、これを一対比較法により、各一〇五組につき、「好きな方」を選択させる。被験者は東京山手の A 幼稚園児 (六才児・五才児計五九名)、実験は昭和三十三年三月に実施された。

三、実験結果

実験結果を綜合し、幼児のもっとも好む色彩の順に排列すれば、表の通りである。

四、結論

一、刺戟による差は比較的少ないが、自動車や円板(無意味形体として提示したが)